

鳥井夏希¹: 報告—第54回日本植生史学会談話会Natsuki Torii¹: Report—The 54rd forum of the Japanese Association of Historical Botany

2025年12月1日に「岡山の花崗岩植生と古代山城」という題目で第54回日本植生史談話会が開催された。世話人は岡山理科大学の太田謙氏、那須浩郎氏、黒木出氏、實吉玄貴氏にお願いし、参加者16名、総勢20名で談話会が実施された。談話会の行程は、岡山駅集合→天目山→八丈岩山・三頂山→道の駅みやま公園にて昼食→阿弥陀原→鬼ノ城→岡山駅解散という順序で行われた。

参加者一行は岡山駅バスターミナルに集合し、マイクロバスで最初の目的地である天目山へ向かった。道中、人造湖である児島湖を車窓から眺めつつ、淡水と海水を仕切る児島湾締切堤防の上を通過した。目的地である天目山や三頂山が位置する児島半島は、花崗岩からなる標高200～400mの急峻な地形を呈し、花崗岩地特有の植生が見られた。天目山には、痩せ地を好むアカマツやネズミサシをはじめ、ウバメガシやコバノミツバツツジなどが生育していた。これらの樹木はいずれも低木が多く、大木はほとんど見られなかった。山頂に到着すると児島半島の様子を眺望できたが、当日は曇天であったため、瀬戸内海に浮かぶ島々の景観を望めなかったことは心残りである。児島半島は近代以降、製塩のための薪の利用により禿山となり、加えて真砂土の地質が相まって自然回復が困難な状態にあった。しかしながら、1970年代以降、斜面を階段状に掘削して植林する「階段工」によって植生回復が進められてきた。頂上からは、この階段工による掘削跡も確認できた。また、対岸の尾根には2025年3月23日に発生した大規模山林火災の跡と花崗岩体が一望できた。

次に、一行は八丈岩山・三頂山へ向かった。ここでは岡山県と岡山市の特別な許可を得て、山火事跡を直接観察することができた。焼失を免れた植生は天目山とほぼ同様であったが、ウバメガシが多く見られ、オオバヤシャブシも目立っていた。尾根筋の登山道を進み、山林火災で焼けた区域に入ると、一行は焼失した森林の状況と、そこから萌芽した植物の様子を熱心に観察した(図1)。地下茎により焼失を免れたネザサやケネザサが先駆種として萌芽している様子や、幹が完全に燃えなかった樹木の基部から新しい芽が出ている様子など、山火事後の植生回復の最初期段階を観察することができた。その後、一行は下山し、道の駅みやま公園にて地元産の鱈を用いた焼き魚定食を味わった。

午後からは児島半島を離れ、阿弥陀原と鬼ノ城を訪れた。シリブカガシ林が位置する阿弥陀原は鬼ノ城の東麓にあたり、奥坂休憩所にバスを停め、休憩所近くのシリブカガシを観察した後、周囲の植生を見ながらシリブカガシ優占林まで歩を進めた。途中、アベマキの大木や、コナラ、アラカシ、



図1 三頂山にて山火事跡を観察する参加者。

ウラジロノキなどが観察された。シリブカガシは沢筋の岩礫がゴロゴロとある攪乱地に局所的に優占林を形成しており、根にはデンプンを蓄える塊根があるため、不安定な攪乱環境で生存に有利であるとの解説があった(図2)。また、次に向かった鬼ノ城から俯瞰すると、周囲が紅葉する中で常緑のシリブカガシ林が局所的に青く広がっている様子を確認できた。

最後に鬼ノ城を訪れた。鬼ノ城は吉備高原の最南端に位置する古代山城(7世紀後半～8世紀)である。白村江の戦い(663年)で唐・新羅連合軍に敗れた倭がさらなる侵攻を恐れ、西日本各地に築いた対外防衛施設の一つとされる。一行は鬼ノ城駐車場でバスを降り、西門を望む展望デッキで集合写真を撮影し(図3)、西門へ向かった。西門で



図2 阿弥陀原のシリブカガシ優占林の様相。



図3 鬼ノ城展望デッキにて（那須浩郎氏提供）。

は、花崗岩の敷石や石段の遺構、そして数メートルもの真砂土を突き固めて何層にも積み重ねた土塁による城壁の復元を観察し、当時の城が大変立派なものであったことが推察された。その後、一行は林間コースをたどり、鬼ノ城の植生を観察しつつ活発な議論を交わした。鬼ノ城の植生は天然アカマツが優占するアカマツ林で、リョウブやソヨゴ、稀にコナラが混生する。さらに、鬼ノ城内に形成された特異な湿地にも立ち寄り、参加者は熱心に観察を行った（図4）。湿地ではイヌノハナヒゲ類やトダシバが優占し、ミミ



図4 鬼ノ城にて湿地を観察する参加者（那須浩郎氏提供）。

カキグサや、オオミズゴケ、モウセンゴケなども見られた。この湿地は自然に形成されたものではなく、もともとはため池などの治水施設として利用されていた場所が放棄され、湿地化したものと考えられている。鬼ノ城周辺は花崗岩地であるが風化した真砂土に覆われ、水分保持力が高い地質である。そのため、鬼ノ城では複数の水門が設置され、水が豊かな城であったことがうかがえた。次に、屏風折れの高石垣を訪れた。ここからは総社市の街並み、岡山平野、そして瀬戸内海まで一望できる素晴らしい眺望で、古代の人々がこの地に城を構えた理由を実感できた。屏風折れ到着時には日が傾き始めており、早めに駐車場へ戻ることとなった。帰路では、夕陽に照らされ徐々に赤く染まる景色を眺めつつ、東門、南門、各水門、西門を横目にバスまで戻った。世話人の方々の尽力によりほぼ予定通りの時間で岡山駅に到着し、解散となった。

今回の談話会では、花崗岩地の植生や、山火事の被害と回復、全国的にも珍しいシリブカガシ林、古代山城の遺構と土地利用・植生について学び、非常に濃密な一日を過ごすことができた。参加者は終始、植生観察と活発な議論に取り組み、有意義な談話会となった。最後に、素晴らしい談話会を準備・運営してくださった世話人の皆様に深く感謝申し上げたい。

(〒690-8504 鳥根県松江市西川津町 1060 鳥根大学自然科学研究科（博士後期課程）創成理工学専攻)